

令和1年度 第1回北空知地域入退院支援研修会開催結果・評価

項 目	内 容
1日 時	令和1年7月22日(月) 18:15～19:45
2内 容	<p>1 事例紹介「ストマケアを通じて、本人・家族への支援を深める」 深川市立病院4東病棟 看護師 遠藤行氏</p> <p>2 事例検討 「本人・家族の思いに寄り添った在宅生活への移行支援について」 「そのためにどのような情報を共有し整理ができればよいかについて」</p>
3出席者	看護職40名、介護支援専門員21名、MSW・SW・相談員 9名、リハビリ職3名 保健師6名、薬剤師1名、歯科医1名、介護福祉士1名、事務職3名 <u>合計86名</u>
4結 果	<p>1 事例紹介「ストマケアを通じて、本人・家族への支援を深める」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部配付資料あり。スライドで事例紹介を実施。 ・紹介後質疑の時間を設けるとともに、グループワーク時に巡回し質疑に応えた。 <p>2 事例検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15G、1G5～6人で検討を実施。 ・テーマ2点 「本人・家族に寄り添った支援をするためには、どのような情報・関わりが必要ですか」 「このような方が退院した際に、どのような支援ができますか」 ・各グループにファシリテーターを配置。ファシリテーターは開始時刻前に集合し、役割を進行担当からレクチャーし、事例検討では混乱なく活発に意見交換ができていた。 <p>3 全体共有・アンケート記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年は、各グループの内容が重複しないように発表してもらったが、今回は自由に発表できるように内容が重複しても構わないこととした。 ・発表したいと挙手があったグループが2Gあった。 ・各G報告内容：①「本人・家族の思いに寄り添った在宅生活への移行支援」 ②「どのような情報を共有し整理ができればよいか」 <p>13G：①家族関係の確認。 ②夫が心配。退院後は外来看護師しか関わらない。夫の体調も含めて話しを聞く。</p> <p>12G：②夫の疲れが出てくるタイミングで介護サービスにつなげる。</p> <p>10G：①清潔面の心配、パウチ交換で浴室等の環境確認が必要。 ②退院後、外来まで3週間あり、その間が心配。包括支援センターの保健師が訪問できるかなど、何か連携がとれればよい。</p> <p>6G：①病院嫌い、入浴しない原因について聞き出せたらと思う。 ②痛みや食事量は個人差があり、夫へ具体的な部分を説明し、受診しやすくなるよう配慮する。</p> <p>5G：②退院3週間後の受診は長い。夫だけ来院して在宅の生活状況を聞ければよい。</p> <p>3G：①最期をどのような場所で過ごしたいのか。 ②家族以外の支援者（地域の方）がいたらよい。</p> <p>1G：①どうなったらどこに相談すべきか、本人・夫、個別にフォローが必要。</p> <p>4 閉会</p>

<p>5 評価 達成度 について</p> <p>○→達成・ 良かった</p> <p>△→ほぼ 達成・ まあまあ 良かった が課題あり</p> <p>×→達成 できてい ない・良く なかった</p> <p>企 画</p>	<p>○地域の入退院支援の課題に即した企画だったか→○</p> <p>※課題 ①対象を理解し、ニーズを明確にすることで、本人に合った支援ができるが、本人の思いを確認せず、支援を展開していることが多い</p> <p>②切れ目のない支援を展開するために医療と介護のタイムリーな情報共有が必要であるが、その体制が整っていない。</p> <p>(令和元年度北空知地域入退院支援研修会企画案より)</p> <p><事例について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・直腸がん・肝転移であり、予後不良のケース。もともと病院嫌いで受診歴がなかった。体動困難となり、失禁もあったことから困った夫が深川市立病院SWへ相談。SWから地域包括支援係へ連絡して保健師訪問するも本人接触拒否であった。 ・救急搬送により入院となり、人工肛門造設術施行。自宅退院予定のため、ストマケアの自立を優先し、退院支援を行った。当初は訪問看護導入予定であったが金銭的な問題やパウチ交換手技取得が順調であったことから導入はせず、家族と院内スタッフのみで退院支援を行い、自宅退院した。 ・サービスを受けたくないという地域でよくある困難ケースであり、どう支援するかを活発に意見交換できる事例であった。 ・病棟としても家族の思いを聞くことの大切さを実感できたり、外来や地域包括の保健師と連携することの重要性を確認でき、気づきの得られる事例であった。 <p><事例検討のすすめ方と結果について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマを2点(2「内容」参照)据え、①在宅生活への移行支援について ②どのような情報を共有して整理ができればよいかについて検討をした。2つのテーマに絞ったことで一つのテーマにしっかり時間をかけて話しをすることができた。 ・研修会の回数を重ねるごとに参加者のスキルがあがり、短時間でしっかりと意見が出てまとめることができていた。各ファシリテーターはうまく話しをまとめることができていたが、中には細かな情報にとらわれて質問が次々と続いてしまうグループもあり、司会や運営スタッフの軌道修正が必要なグループもあった。 ・全体共有では生活環境、退院後の相談機関の情報提供、家族関係やそれぞれの思い、最期をどう過ごしたいか、夫へのサポートの必要性などの意見が聞かれていた。 ・アンケートからは、スタッフ間の情報共有・連携の大切さ、本人・家族からの情報収集、今後の在宅生活に対する情報提供を行う必要性等の記載があった。 ・グループでの記録は模造紙へ自由記載とした。発表に使用しないとアナウンスしたこともあり、各グループ積極的に書き込めており、記載のレベルも向上していた。 <p>以上から①②の課題に即し、課題について検討する場を提供できた企画であった。</p> <p>○周知方法はどうか→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催通知文にて周知。平成30年度第2回より参加人数は増加している。(82名→86名) <p>○会場の状況はどうか→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広さとしては15テーブル(各6名)までは適切であるが、超えると難しい。
---	--

<p>プ ロ セ ス</p>	<p>○小部会の打合せ・準備状況→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回研修会の企画会議を4回実施（5／30、6／11、6／26、7／16） ・1回目は第1回研修会の開催準備スケジュールの確認と役割分担、2回目は開催要項、研修目的・目標の設定。事例提供者の選定、3回目は事例検討の進め方、提供事例の概要確認、4回目は最終確認として実施。 ・小部会の他に担当ごとにも集まってもいた。効率的に進行し、目的を達成する研修会とするためには細かな打ち合わせも重要であり、適切な打ち合わせ回数であった。 <p>○小部会のメンバーそれぞれが役割を遂行できたか→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事例提供者へのサポート、具体的な運営の企画・準備など小部会で役割を分担しながらすすめることができた。 ・グループ決め、ファシリテーター選定などはそれぞれの所属が中心となり行うことでスムーズに行うことができた。 <p>○ねらった参加者の参加→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療と介護の連携のそれぞれ要となる職種である、看護職、ケアマネジャーが大半を占めている。 ・アンケート結果から経験年数は15年以上が半数以上を占め、5年以上15年未満が18%と少ない。5年未満は25%であるが、平成30年度2回目の16.4%から上昇がみられた。 ・市立病院以外の医療機関の看護職の参加は少ないが、テーマが入退院支援であり慢性期病院や精神科病院の看護職には実務に直結しない内容でもある。他の研修会へは出席しているようなので、あえて参加を促すことはしなくてもいいのではないかと。
<p>結 果</p>	<p>○参加者数、職種→△</p> <p>看護職36名、介護支援専門員20名、MSW・SW・相談員9名、リハビリ職3名、保健師6名、薬剤師1名、歯科医1名、介護福祉士1名、事務職3名 合計86名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年第2回より参加数は増加している。 ・看護職及びケアマネ以外の職種は少ないが、平成30年第2回と比較して職種及び人数（12名→18名）は増加している。 ・会場の広さの問題でヘルパー事業所には声をかけていないが、事例によっては声をかけたい。受け入れ人数を増やすために会場を病院外にすると病棟看護師の参加が減ってしまうため、声をかける職種を増やすと人数調整が課題となる。 <p>○参加者の満足度→○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果、研修内容について「よかった、まあまあ良かった」の選択は99%と満足度は高かった。 <p>○タイムリーな情報共有の必要性と手段について語れたか→△</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来看護師や夫への働きかけなど具体的な手段まで話しあえているグループもあった。 ・研修後、病棟看護師からは「いつがタイムリーなのか」「いつ何を話せばよかったのか」

	<p>という質問があり、情報共有の必要性の気づきの深めで終わっていた印象もあった。</p> <p>○本人・家族の思いに添った支援について語れたか→△</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族の思いには共感できていたが、本人の思いはどうだったのか、その思いに添った支援とはどのようなものだったのか、自分事としてもう少し深めて考えられたらよかったのではないか。 ・ターミナルの事例であり、最期をどうしたいと本人・家族は考えているのかなど、多職種で様々な方向からの話し合いができるとより良かったのではないか。
<p>ま と め</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・入退院支援研修会の目標は概ね達成できた。 ・全体の流れがよく、スムーズな司会進行で時間通りに終了できた。 ・回数を重ねるごとにファシリテーター、参加者のスキルも上がり、グループワークがスムーズに行えている。 ・毎回参加している方もいるようであり、次回よりアンケートで退院支援研修会へ何回目の出席であるかを記載してもらおう項目をつくる。そのうえで、複数回参加しても飽きないような研修内容、スキルアップできるような内容を検討していく必要がある。